

# 中世、黄金世紀スペイン語における 「前置詞＋無強勢代名詞＋不定詞」について<sup>1)</sup>

菊 田 和佳子

## 0. はじめに

中世、黄金世紀のスペイン語における無強勢代名詞とそれを支配する動詞の位置関係は非常に複雑な諸相を呈しており、スペイン語史におけるもっとも重要なテーマの一つとなっている。本稿は、無強勢代名詞の位置に関する諸問題の中でも、特に中世から黄金世紀の文学作品において好んで用いられた「前置詞＋無強勢代名詞＋不定詞」の形式に特に注目し、その当時は一般に前接辞であったと言われている無強勢代名詞がなぜ不定詞の前に出て、強勢を持たない前置詞の直後に位置することになったのかについて、主に音声、音韻的な観点から考察する。

### 0.1 中世、黄金世紀スペイン語における無強勢代名詞の位置

最初に「前置詞＋不定詞」に共起する無強勢代名詞の位置について確認しておこう。現在のスペイン語では、無強勢代名詞はすべて不定詞の直後におかれ、それに前接する。

---

1) 本稿は2009年7月25日東京外国語大学で開催された東京スペイン語学研究会において口頭発表した内容に再検討を加えてまとめたものである。貴重なご意見を下さった出席者の皆さまには深く感謝申し上げたい。

- (1) Me alegro de verte pronto.  
 (2) He venido aquí para decírtelo.

しかし、中世および黄金世紀のスペイン語では、無強勢代名詞を不定詞に前置することも後置することもあった<sup>2)</sup>。

#### A. para hacerlo 型

現在と同じように、「前置詞＋不定詞」に支配される無強勢代名詞は、不定詞に前接することが可能であった。

- (3) Casi todo aquel día caminó sin acontecerle cosa que de contar fuese, de lo cual se desesperaba, porque quisiera topar luego luego con quien hacer experiencia del valor de su fuerte brazo. (Quijote, p. 107)
- (4) De verte o de oyrtte descender por la escalera, parlan lo que éstos fingidamente han dicho, en cuyas falsas palabras pones el fin de tu desseo. (Celestina, p. 115)

#### B. para lo hacer 型

しかし、16世紀までは無強勢代名詞が不定詞に前置されることも少なくなかった。文頭や休止の後においても、この形は頻繁に用いられた。すなわち、中世、黄金世紀のスペイン語では、para hacerlo 型と para lo hacer 型が共存していたことになる。

---

2) 説明の便宜のために、本稿では「前置詞＋不定詞＋無強勢代名詞」の連辞を para hacerlo 型、「前置詞＋無強勢代名詞＋不定詞」の連辞を para lo hacer 型と呼ぶことにする。

- (5) (...) y el intento de tus palabras [Calisto] ha seydo *cómo* de ingenio de tal hombre como tú aver<sup>d</sup> de salir para se perder en la virtud de tal mujer como yo. (Celestina, p. 87)

- (6) Por me lo otorgar, señoras, escrevirvos he grand saçon de dicho e de fecho e de todo coraçon (...) (Libro de Buen Amor, 494)

また、16世紀の文法家 Juan de Valdés は、当時のスペイン語では *hacerlo* 型も *lo hacer* 型も同じように使えたという証言を残している。Valdés にとっては、*hacerlo* 型の方がより一般的で、純粹であり、エレガントでカスティーヤ語的と考えられるものであったらしい。正確に言えば、Valdés の記述では、それが「(助) 動詞＋不定詞」の連辞に現われるものか、「前置詞＋不定詞」の連辞に現われるものかがはっきりとしていない。しかし、Valdés 本人は下記に引用した自身の著作 “*Diálogo de la lengua*” の中で、(助) 動詞の後ろであろうと、前置詞の後ろであろうと、基本的に *hacerlo* 型を用いている。Valdés の記述は、「前置詞＋不定詞」の構造についてもあてはまると考えてよいであろう。

- (7) Valdés (1491–1541), *Diálogo de la lengua* (成立年不明) (下線は菊田)

V. También avisaría que conviene usar la composición del verbo con *lo* y *la*, *los*, y *las* muy libremente, sin pensar decir por otra manera lo que se puede decir por aquélla.

M. ¿Cómo se haze essa composición?

V. Diciendo *hablarlo* y *traerla*, *hablarlos* y *traerlas*.

M. ¿Qué queréis en esto, que no os entiendo?

V. Que se deve usar esta composición de la manera que digo, y no andar por las ramas como algunos, que por no hablar como los otros dizen por *ponerlos*, *los poner*, y por *traerlas*, *las traer*, etc. Es bien verdad que lo uno y lo otro se puede seguramente usar, pero el decir *ponerlos* y *traerlas* a mi parecer es más llano y más puro, y aun más galano y más castellano.

なお、Eberenz (200: 157-164) によれば、15 世紀の末までは para lo hacer 型が優位だったという。para hacerlo 型もその傍らに常に存在はしていたが、その使用頻度が 25% を越えることはめったになかった。また、懐古的な文体が好まれる作品では 16 世紀の間も para lo hacer 型が使われ続けたようである。その用いられ方は文体や話法などによって異なり、直接話法では para hacerlo 型が優位であるのに対し、間接話法では、para lo hacer 型が優位であるという傾向がみられる。Eberenz は、para lo hacer 型は（書きことばで）よく考えられた文体（lengua elaborada）の特徴であることを示唆している。

## 0.2 不定詞と無強勢代名詞の一般的な位置関係

文における無強勢代名詞の位置については、既に多くの先行研究が存在し、分析がかなり進んでいる。ここでは先行研究を参照しつつ、無強勢代名詞の基本的な性質を確認しておく。

### 0.2.1 代名詞の基本的な性質

まずは無強勢代名詞配置の一般的な規則について確認しておこう。下

記の Posner (1996) の記述からも分かるように、無強勢代名詞の基本的性質は enclisis (前接)<sup>3)</sup> であった。

(8) Posner (1996: 218) (下線は菊田)

En las lenguas antiguas los pronombres “débiles” y “fuertes” eran variantes que dependían de las diferencias de énfasis: las formas de objeto átonas se solían adjuntar en enclisis a cualquier palabra que ocupara la posición inicial de la oración — ya fuera el verbo, el sujeto o cualquier otra palabra acentuada — y, en estos últimos casos, podía quedar separada del verbo por otros elementos. Este es un esquema habitual en otras lenguas indoeuropeas, por el cual no puede empezar la oración un elemento átono (la ley de Wackernagel tiene su equivalente en romance en la ley de Toblar-Mussafia).

Posner によれば、無強勢の目的格代名詞は文頭の位置に来る語が何であれ、それが強勢語であればその文頭の要素に前接したという (例, El rey me dixo). 一方、無強勢の代名詞は文を始めることが出来な

3) なお、無強勢代名詞とそれに先行する要素との関係については、研究者の間で解釈の違いがみられる。つまり、単に語順のみに注目し、無強勢代名詞の前には強勢のある要素が来るという点のみを問題にする研究者もいれば、先行する要素に音声的に結びつく点を重視する研究者もいる。本稿では、Real Academia Española の定義に基づいて、前接の代名詞は単に文を始められないだけでなく、先行する強勢を持つ要素に音声的に結びつくと考える。“enclisis/proclisis: Palabras inacentuadas o átonas. Algunas palabras carecen de sílaba tónica, por lo que se unen, a efectos de pronunciación, a la palabra tónica que las sigue o a la que las precede, formando con ella un grupo acentual. Estas voces que carecen de independencia fónica se denominan «palabras clíticas» o «clíticos»; si se agrupan con la palabra tónica siguiente, se llaman «proclíticos»: *en mi casa* [enmikasá] (la preposición y el posesivo, que son átonos, son aquí palabras proclíticas); y si lo hacen con la palabra tónica precedente, se llaman «enclíticos»: *dímelo* [dímelo] (los pronombres personales átonos *me* y *lo* son, en este caso, palabras enclíticas; los pronombres enclíticos se escriben siempre unidos al verbo). (RAE: Diccionario pánhispánico de dudas, 2005)”

ったため、それが文頭に来てしまいそうな場合には、動詞の方を前に出し、動詞に前接することとなる（例、*Díxome el rey.*）。Posner によれば、無強勢代名詞を文頭に置かないというこの性質は印欧語に共通した性質であったようである。

また、Keniston (1937) は呼気段落あるいは音声グループ (breath-group) における無強勢代名詞の位置を詳しく検証した。Keniston によれば、無強勢代名詞の配置については「音韻上の制約」があり、同じ呼気段落で動詞が最初の強勢を持つ要素となる場合には、無強勢代名詞は動詞の後ろに置かれ、同じ呼気段落の中で強勢を持つ要素が動詞に先行する場合には、無強勢代名詞は動詞の前に置かれるという。これは実質的には Posner の説明とも一致しており、現在では無強勢代名詞の位置についての基本的な規則として広く認められている。

## 0. 2. 2 不定詞と共起する代名詞の位置

次に本稿に深く関連する不定詞に対する無強勢代名詞の位置について確認しておこう。前述の Keniston は、「定動詞 + 無強勢代名詞」の場合と同じく、「不定詞 + 無強勢代名詞」の場合にも、強勢が置かれる要素とその位置を重視した。一般的に無強勢代名詞は不定詞に後置されるが、不定詞に強勢を持つ要素が前置されれば、無強勢代名詞は不定詞の前に来ることも珍しくなかったという。

### (9) Keniston (1937: 98) (下線は菊田)

III. Simple infinitives. As has already been remarked, the object pronoun usually follows the infinitive. But throughout the century it is not uncommon to place the pronoun before the infinitive when a stressed element precedes the infinitive. The

construction is however, of decreasing frequency; of the 150 counted examples, 101 are found in the first half of the century.

不定詞は（助）動詞に支配されることが多く、構成要素が増える分だけ、複雑な様相を呈しているが、それでもやはり無強勢代名詞は文頭に置かれることはなかった<sup>4)</sup>。定動詞と共起する場合でも、不定詞と共起する場合でも、無強勢代名詞は前接辞として機能していたのである。すなわち、無強勢代名詞は、それが支配する動詞の文法形式とは関わりなく、音韻上の制約によってその位置が決定されていたと言えるのである。

#### 0.2.3 「前置詞＋不定詞」と共起する代名詞の位置

上の0.1で見た内容と一部重複するが、最後に本稿のテーマである「前置詞＋不定詞」とそれに共起する無強勢代名詞についての位置関係について確認しておく。これは Hanssen (1913) が比較的詳しい。Hanssen によれば、初期の文献には *para hacerlo* 型が多かったが、14世紀から *para lo hacer* 型が増え、15-16世紀には優位になっていたことが分かる。これは前述の Eberenz の記述ともほぼ一致していると言えるだろう。また、16世紀を過ぎてからは *para lo hacer* 型は徐々に用いられなくなるが、この年代はいわゆる「音韻上の制約」や「音韻上の安定」が弱まって行く時期とも合致している<sup>5)</sup>。

#### (10) Hanssen (1913: 196-7) (下線は菊田)

Los casos oblicuos del pronombre personal pueden separarse  
del verbo cuando pertenecen á un infinitivo ó gerundio: *no*

4) 詳しくは菊田 (2008) を参照されたい。

5) ただし無強勢代名詞が文頭に用いられるまでにはもう少し時間がかかっている。詳しくは菊田 (2004)、菊田 (2008) を参照されたい。

*quiero decirlo*. (…)  
Cuando el infinitivo viene regido por una preposición, se dice en antiguo castellano *por lo matar* (Cr.G. 187b, 47) y *pora vencerse* (Cr.G. 416a, 10). *por lo matar* se puede comparar con *e lo dixo* y *por matarlo* con *e díxolo*. También aquí se puede presentar el caso de que el verbo venga precedido de varias palabras débiles: *por se non egualar á su padre* (Cr.G. 195b, 51). De las dos formas *de lo fazer* y *de fazerlo* prevalece la segunda en los primeros documentos. La primera aumenta en el siglo XIV y domina en los siglos XV y XVI. Después desaparece (Gessner, Z. XVII, 53; Weigert 58; Subak, Z.XXX, 131). (…)

## 1. 問題提起

さて、本稿で問題にするのは、中世および黄金世紀で用いられた2つの形式のうちの1つである *para lo hacer* 型についてである。この形は上記の例でも見たとおり、文頭でも文中でも用いられていたものだが、実は無強勢代名詞の配置の大前提である音韻上の制約に反している。0.2でも述べたとおり、無強勢代名詞は原則として前接辞であり、先行する強勢を持つ要素に音声的に融合するはずだが、*para lo hacer* 型の場合には、無強勢語である前置詞が無強勢代名詞に先行している。文中であれば、前置詞の前にある要素に前置詞ごと引きつけられたと考えられなくもないが、文頭や休止の後に前置詞が現われる場合は、無強勢代名詞が不定詞の前に来ている理由が説明できない。前置詞とそれに続く要素はそれ自体で呼気段落 (Keniston の言う *breath-group*) を形成することも多い。その場合、呼気段落内で無強勢代名詞が強勢を持たないは

ずの前置詞の直後に置かれるのは不自然ではないかという疑問が生じる。

しかし、すでに見たように厳然として para lo hacer 型は存在している。他方に para hacerlo 型があったにも関わらず、para lo hacer 型が多用されたのには、おそらく、無強勢代名詞を不定詞の前に置く語順を誘発する要因があったはずであると考えられる。音韻上の制約には反している（ように見える）にも関わらず「前置詞＋無強勢代名詞＋不定詞」の形式が一定期間用いられた要因を明らかにするために、本稿では次のような観点から考察を進めていくことにする。

- (11) 音声的要因①—前置詞の強勢について
- (12) 音声的要因②—無強勢代名詞の後接辞的な性質について
- (13) 情報構造上の便宜—代名詞を前に出すべき情報構造上の理由について<sup>6)</sup>

## 2. 考察

### 2.1 音声的要因①—前置詞の強勢について

中世から現代に至るまでスペイン語の前置詞は強勢を持たないというのが定説である。しかし、この前置詞に何らかの形で強勢がおかれれば、「音韻上の制約」に関する矛盾はなくなる。「音韻上の制約」を非常に重視している Keniston 自身は、定説に反して前置詞の強勢について次のように述べている。

- (14) Keniston (1937: 90) (下線は菊田)

---

6) 2.3において扱うが、(13)については、(11)–(12)とは性質が異なるため本稿においては詳しい考察の対象から外すこととした。

Similarly, the pronoun follows an infinitive or participle when the infinitive or participle is the first stressed element in its particular group. Here sixteenth-century usage shows a certain amount of variation because of a sifting feeling for the extent to which a preposition was capable of bearing a stress. In the earlier language it is clear that prepositions were felt as stressed. And in the sixteenth century some prepositions, such as *para*, *por*, *sin después de*, were apparently still felt as of sufficient weight to bear a stress. When these prepositions introduced an infinitive, or when a relative or interrogative pronoun introduced an infinitive, or when the infinitive was preceded by *no*, the infinitive was not necessarily the first element in its group, and therefore the pronoun might precede the infinitive. But the usual practice of the century was to consider the preposition as unstressed, and hence the pronoun followed the infinitive. The same practice appears in the use of the present participle, although here the only stressed element which naturally precedes the participle is the negative *no*.

確かに「音韻上の制約」を適用するためには、無強勢代名詞に先行する要素には強勢がかからなければならないため、*para lo hacer* 型については、前置詞である *para* に強勢があったと考える方が自身の説にとって都合がよいのであろう。しかし、Keniston は前置詞が強勢語であると感じられた点について根拠となるような材料は何も具体的には挙げていない。本稿の目的は、*para lo hacer* 型において無強勢代名詞が不定詞の前に来る理由を明らかにすることであるが、その過程でこの

Keniston の記述を補う何らかの材料を示すことができればと思う。

### 2. 1. 1 ラテン語における前置詞の強勢

考察を始める前にラテン語時代の前置詞の強勢について確認しておこう。Grandgent (1991) によれば、前置詞はラテン語時代から無強勢であったという。

(15) Grandgent (1991: 113)

156. Las voces breves y no enfáticos, en latín como en las otras lenguas, no tenían acento y en la pronunciación se unían como sílabas adicionales al principio o al fin de las demás palabras (S., págs. 38-39): *non-ámat, áma-me, te-vídet, dó-tibi, cave-fácias, circum-lítora* (Quintiliano, I, 5). Muchas palabras, especialmente preposiciones y conjunciones, lo mismo que algunos adverbios y pronombres, se usaban solamente como enclíticas o proclíticas.

ただし、いくつかの前置詞には強勢を持っていた形跡があるものもある。たとえば、contra (<CONTRA) は時代によって encuentra となっていることがあり、CON が強勢を持つ音節であったことがうかがえる<sup>7)</sup>。また Bourciez (1967: 39-40) によれば、ad などの前置詞は古典ラテン語時代には文脈によっては強勢を持つこともあったが、のちに失われて後接辞になったと考えられるという。しかし、前者の例はごく限られた地域、年代におけるものであり、後者の例も古典ラテン語時代の限られたケースである。一般的にはラテン語の時代から前置詞は無強勢

7) Menéndez Pidal (1989: 336)

語であり、その性質がスペイン語にも引き継がれたと考えてよいであろう。

## 2. 1. 2. 相対的な強勢

すでに見たように、ラテン語時代もスペイン語になってからも、音韻レベルでは前置詞は無強勢語であったと考えられる。しかし、音声レベルでは前置詞にある種の強勢（らしきもの）がおかれた可能性を示唆する性質がスペイン語にはある。

次の Alarcos (1994) の引用は現代スペイン語に関するものであるが、強勢のある音節の前に多くの強勢のない音節が並ぶ場合には、表現を豊かにするリズムによって、2 次的な強さを持った音節との交替が行われることを明らかにしている。これはあくまでも相対的な強さであって、無強勢語を強勢語にするほどのものではなかったが、相対的な強さの違いを付けることで、文のリズムを整えたり、表現を豊かにしたりする働きがあったと言える。

### (16) Alarcos (1994: 46) (下線は菊田)

46. El número de sílabas átonas que en la secuencia pueden preceder a la tónica es indefinido. En *constantinopolitâno* se suceden seis sílabas inacentuadas delante de la tónica *tâ*; en *Pero cuando para nuestra incompatibilidâd* son trece las sílabas átonas que preceden a la tónica *dâd*. Sin embargo, en estos casos, el ritmo elocutivo suele establecer una alternancia de sílabas con intensidad secundaria, menor que la de la tónica, pero mayor que la de las átonas.

本稿のテーマである para lo hacer 型の場合には、前置詞の後ろに無強勢代名詞が並ぶため、上の例と同じように主たる強勢を持つ不定詞の前に強勢のない音節がいくつも並ぶことになる（例. para lo hacer, por te lo comprar）。Alarcos を援用すれば、「前置詞＋無強勢代名詞＋不定詞」の連辞の場合にも、本来無強勢である音節にリズムを整えるための第2強勢がおかれる可能性があると考えすることはできないだろうか。

なお、似たような現象はロマンス語全般に見られるようである。Lausberg (1965) はロマンス諸語には強勢の前でかつ語頭の音節に第2強勢がおかれる傾向があると考えている<sup>8)</sup>。

(17) Lausberg (1965: Tomo I, 153)

177. La primera sílaba protónica (inicial de palabra) lleva el acento secundario; esto es, se articula con una intensidad inmediatamente inferior a la de la sílaba que lleva el acento principal: *mànière, sanitàte, mânducâre, viridiâriu, ântecessóre*.

この記述はあくまでも1つの語の内部においてもものであるが、Lausberg は同書の中で無強勢語は強勢のある語に音声的に融合して1語の mot phonétique（音声レベルの語）を形成するとも述べている。

(18) Lausberg (1965: Tomo I, 450)

576. La manifestación más importante de la fonética sintáctica consiste en borrar los límites de las palabras. Los elementos átonos suelen asociarse a los elementos tónicos vecinos, con los

---

8) Lausberg はこの現象がいつの時代に当てはまるものかは述べていない。しかし多くラテン語の例を主に挙げている点、また現代のスペイン語にも同様の傾向がみられる点から、これがラテン語から現代まで引き継がれている性質であると考えられる。

que forman un ritmo o unidad elocutiva más o menos estrecha. La forma más íntima de la unidad elocutiva se llama *mot phonétique*; la palabra fonética es un grupo de palabras que fonéticamente son tratadas como una palabra sola.

この2つの引用の内容を合わせて考えると「前置詞＋無強勢代名詞＋不定詞」の連鎖が1つの *mot phonétique* を形成し、その語の最初の音節にも相対的な強勢がかかる可能性があると言うことができそうである。

さらに、この第2強勢について、さらに明確に記述しているのが、Gili Gaya (1988) である。Gili Gaya によれば、無強勢の音節が続いた場合、強勢の強さにグレードを付けて、リズムを整える傾向が認められるという。この第2強勢で相対的な強さを補う性質はどの言語においても観察されるもので、また、スペイン語には特に最初の音節を強める性質が顕著に見られるようである。

(19) Gili Gaya (1988: 38) (下線は菊田)

En la sucesión de las sílabas inacentuadas dentro de cada grupo, se percibe en todas las lenguas una tendencia a la alternancia de sus intensidades relativas, a partir del acento principal. Señalando arbitrariamente tres grados de intensidad, con las cifras 3, 2, 1 la alternancia rítmica del español puede representarse así:

|     |     |    |    |    |     |
|-----|-----|----|----|----|-----|
| con | sue | tu | di | na | rio |
| 2   | 1   | 2  | 1  | 3  | 1   |

|     |    |      |    |
|-----|----|------|----|
| gua | pe | to   | na |
| 2   | 1  | 3    | 1  |
| es  | tu | diar |    |
| 2   | 1  | 3    |    |

Varias circunstancias pueden perturbar esta regularidad, entre ellas el acento de insistencia sobre determinada sílaba que se siente como más expresiva. En español se observa además una clara tendencia a fortalecer la sílaba inicial:

|     |    |    |    |    |
|-----|----|----|----|----|
| por | la | ma | ña | na |
| 2   | 1  | 1  | 3  | 1  |
| li  | te | ra | tu | ra |
| 2   | 1  | 1  | 3  | 1  |

Este vaivén inconsciente en el relieve silábico relativo tiene su origen en el hecho psicofisiológico de que los movimientos iguales y repetidos en serie más o menos extensa, no son del todo idénticos, sino que se organizan con tendencia a un ritmo.

同じような記述は Navarro Tomás (1991), Bassols de Climent (1992), Canellada & Madsen (1987) などにもみられる。また、こうした相対的な強勢は、日常の会話でもよく観察されるものである。スペイン語には無強勢の要素が長く並ぶ場合にリズムを整えるために相対的な強勢を主に音声連鎖の最初の音節に置く傾向を潜在的に持っていると考えてよいだろう。無強勢代名詞は前置詞より前に出ることがなく、前置詞が呼気段落の最初の要素になりやすいことを考えると、para lo hacer 型の連辞においては、前置詞の方が相対的な強勢を帯びやすかったと考えられる。

### 2. 1. 3 呼気段落における無強勢代名詞の第2位置

上記で述べた事項と関連するが、無強勢代名詞は、強勢がかからないというその性質から、呼気段落の2番目の位置に置かれる傾向があったと考えられている。Sánchez Miret (2007)によれば、接辞代名詞は、前方照応の機能を持っているため、句または文の最初の方に置かれることが多かったという。従って、ロマンス語の古い句（または文）においては、無強勢代名詞は句の最初の語に前接するのが普通だった。

#### (20) Sánchez Miret (2007: 267) (注9は菊田)

El problema de la posición que ocupan los clíticos se ha afrontado desde dos perspectivas: 1) su posición dentro de la frase; 2) su posición en relación con el verbo. Dentro de la frase tienden a ocupar las primeras posiciones, ya que su función es anafórica. En las frases antiguas de las lenguas románicas el pronombre solía ser enclítico de la primera palabra de la frase: p.ej. port. *eu+te, que+te, pera+lhe* en *eute leixey ja; eu cuidava quete avia leixado; e foi peralhe chagar*; cast. *si+lo* en *si lo el rey por bien toviere*. Esta posición se conoce como posición Wackernagel<sup>9)</sup>, ya que este lingüista formuló una ley de este tipo para el indoeuropeo.

9) Wackernagel の法則 (亀井 他, 1996: 108)

「古い印欧語では接語ないし付属語 (clitics) と呼ばれる自立的強勢のない形式 (代名詞の弱形、強調助詞、法助詞、接続助詞など) が文の第2番目の位置を占めるという規則である。(…) このように意味的にも音声的にも弱い形式が第2位置に置かれることは、その前の位置すなわち文頭をいわば浮き彫りにすることによって、それを談話機能的な題目 (topic) または焦点 (focus) として前景化するための手段とみることができる (…)」

Sánchez Miret は上記の引用の最後に Wackernagel の法則に言及している。これは無強勢代名詞の位置を考えるうえで非常に重要な法則であり、前述の (8) で引用した Posner にも同様の記述がある。しかし「前置詞＋無強勢代名詞＋不定詞」の連辞の場合には、前置詞そのものも接辞であるため、情報構造と結び付けられることの多い Wackernagel の法則をそのまま援用するのは難しいだろう。ここでは、特に自立的アクセントのない形式が文の第 2 位置を占める傾向があるという点のみに主に注目したい。前置詞は方向や目的などを表すため、時には非常に重要な情報を担うこともある。2.1.2 で扱ったように第 2 強勢がこの前置詞に置かれると想定すれば、無強勢の代名詞をその次の位置に持つることにより、呼気段落の最初の要素が少なくとも音声的には浮き彫りになる効果は認めることはできるだろう。

上で述べたように前置詞に第 2 強勢を認めることで、無強勢の代名詞をその直後に引き付けやすかった理由が説明できる。さらに重要なのは、文であれ、句であれ、その音声的なまとまりの 2 番目に無強勢代名詞を置き、「前置詞＋無強勢代名詞＋不定詞」の連辞となることで「強—弱—強」のリズムを作ることができる点である。無強勢代名詞が第 2 位置に置かれるのは、このリズムを作るために非常に有効であった。

Canfield および Davis (1975) は、フランス語の現在分詞に無強勢代名詞が前置される理由として、前置詞におかれた強勢と、その直後に置かれた無強勢代名詞、そして現在分詞によって生じる「強—弱—強」のリズムを挙げている。また、ロマンス諸語の不定詞に対する無強勢代名詞の位置についての規則についても、元来はそのリズムに基づいて無強勢代名詞の位置が決定されたことを示唆している。

Present participles usually require postposition: Rm. *dându-mi*, Sp. *dándome*, It. *dandomi* (= giving me), but Fr. *en me donnant* with the pronoun sheltered behind the stronger preposition *en* in initial position, resulting in a strong-weak-strong rhythm. Rules for position of pronouns which are objects of infinitives differ nowadays from language to languages, but are based in origin on the same principle of rhythmic stress.

不定詞に対する無強勢代名詞の配置がこの「強—弱—強」のリズムに基づいて決められていたという点、また、「前置詞＋無強勢代名詞＋不定詞」の連辞が厳然として存在していたことを合わせて考慮すると、ある文脈においては、前置詞が相対的に「強」と認められるだけの強さが認められる場合もあったと考えてよいであろう。

これまで 2.1 で行った考察から次の点が導かれる。まず、para lo hacer 型の場合には、主たる強勢の前に複数の無強勢音節が並ぶことになり、スペイン語に内在する性質によって、呼気段落内のリズムを整えるために前置詞に相対的な強勢がおかれた可能性があったという点 (2.1.2) である。本来無強勢語である前置詞に相対的な強勢がかかることによって、無強勢代名詞が前置詞に前接する環境ができ、それによって para lo hacer 型は失われずに使われ続けることになったと言える。さらに、ロマンス諸語に共通する無強勢代名詞が強勢を持たず第 2 位置に置かれる性質は、前置詞に置かれる相対的な強勢と共に、「強—弱—強」のリズムを作り出すのに有効であった (2.1.3)。そのリズムが para lo hacer 型の配置が好まれる 1 つの要因になったのではないかと考えられる。

## 2.2 音声的な要因②—無強勢代名詞の後接辞的な性質について

### 2.2.1 後接辞としての無強勢代名詞の使用

基本的に無強勢代名詞が前接辞であったことはすでに述べたが、para lo hacer 型の場合には、無強勢代名詞が後接辞として機能していた可能性を考えることはできないだろうか。無強勢代名詞に後接辞としての性質を認めれば、2.1 で考察した前置詞の強勢の有無とは関係なく、無強勢代名詞が前に置かれる理由が説明できる。つまり後接辞である前置詞の後ろにさらに後接辞である無強勢代名詞が続き、すべてが不定詞に引きつけられていると考えることになるのである。

実際に、無強勢代名詞が後接辞として機能を潜在的に持っていたことは広く知られている。

#### (22) 中岡 (1992: 40)

中世語では基本的に前接辞であった代名詞弱勢形は、僅かながらも、後接辞として機能している場合もみられる。従って、この近代語的な特徴もかなり早くから潜在的にあった、ということになる。

#### (23) Menéndez Pidal (1994: 402) (下線は菊田)

El pronombre personal átono es generalmente enclítico. Algunas de las grafías que nos lo presentan como proclítico pudieran atribuirse al copista: *vedada lan compra* 62, *venido les mensaie* 975 (contra *acreçidole han* 1419, *dadol ha* 2421, etc.), *non minchal* 230, 2357, *el diezmo la mandado* 1798, pero no hay duda que el poeta conocía al proclisis, en vista de los siete hemistiquios comenzados por pronombre átono, que citaremos

en la p. 406<sub>9</sub>.

この可能性については、菊田（2004）において筆者も認めており、現代スペイン語に至るまでに無強勢代名詞が定動詞の後に置かれるようになったのは、この潜在的な性質がのちに表面化し、広がっていったものと考えている。しかし、中世、黄金世紀スペイン語においては、動詞に後接する代名詞が出現する可能性は非常に低く、あくまでも散発的な現象と判断できる。

さらに、Menéndez Pidal は同じ資料の中で、動詞迂言句に現われる無強勢代名詞の場合には、それが不定詞に前接するものなのか、定動詞に後接するものなのかの区別が出来ない場合があることも示唆している<sup>10)</sup>。また、同様に Posner（1996: 222）も、中世語の無強勢代名詞がどこまで関連する動詞に音声的に依存しているかを判断するのは困難であり、韻律の上で先行の語に融合するのか、後続の語に融合するのかは決め難いと言う。しかし、Menéndez Pidal 自身も指摘しているように、不定詞と無強勢代名詞の融合形の存在（*sabelo, tomallo* など）や、不定詞と定動詞の間に他の要素が入った場合には、無強勢代名詞がその要素に前接する例（*vender non los podremos*）などを考えると、やはり無強勢代名詞は先行する強い要素に引かれる傾向が強く、後接辞というよりは前接辞であったと言えるだろう。

つまり、後接辞的な性質が潜在的には古くからあったことは否定できないが、中世、黄金世紀を通じて無強勢代名詞は基本的には前接辞であったと言える。一方、現代スペイン語においては、定動詞に支配される無強勢代名詞が一貫して動詞に前置される（後接する）が、これは上でも述べた通りもともと潜在していた代名詞の後接辞的な使用が広がった

10) Menéndez Pidal (1994: 408)

ためであると考えられる (2. 2. 2)。

### 2. 2. 2 後接辞としての使用の広がり

最初のごくわずかな場合にしか見られなかった無強勢代名詞の後接辞としての使用は、徐々に広がっていき、最終的には肯定命令、現在分詞、不定詞と共に起する場合を除く、すべての場合で認められることになった。菊田 (2004) は前接辞としての使用が減少し、後接辞としての使用が広がった要因として次の 3 点を挙げている。

#### ① 限定された文脈での使用

音声上の制約が徐々に弱まると無強勢代名詞は文頭と休止の前でのみ定動詞に後置されるようになった。これに対し、文中では無強勢代名詞は定動詞に前置される。文頭や休止の後といった位置に動詞が来るのは非常に限られていた (②参照) ため、類推によって無強勢代名詞は定動詞の前に置かれるようになった。

#### ② 動詞を第 2 位置におく傾向

ロマンス語には (接辞を含む) 動詞グループを文の第 2 位置に置く傾向がある (主語—動詞、副詞—動詞—主語など)。この傾向から動詞が文頭に置かれる可能性は低かった。

#### ③ 形態・統語の整合性

定形動詞の場合には一貫してそれに前置され、不定形の動詞および肯定命令形の場合には後置されるというように、無強勢代名詞の位置が文法形式に応じて決定されることでパラダイムが整理され、混同の危険を回避した。

その結果、無強勢代名詞は、現代スペイン語において、命令形、現在分詞、不定詞がある場合を除き、それを支配する動詞に前置されるよう

になった。また現在分詞、不定詞がある場合も、それを活用した動詞とともに用いられて動詞迂言句を形成する場合には前置が許されている。つまり、「前置詞＋不定詞」の場合や現在分詞や不定詞が単独で用いられるごくまれな場合を除けば、多くの形式に後接辞としての無強勢代名詞の使用が広がっているといえるだろう。

### 2.2.3 「前置詞＋不定詞」の場合

上述の通り、無強勢代名詞は時代とともに後接辞としての性質を強めていくが、それにもかかわらず「前置詞＋不定詞」と共起する場合には、後接辞としての使用（para lo hacer 型）は定着するに至らなかった。定動詞や動詞迂言句に支配される無強勢代名詞が後接辞的な性質を得たのに対し、「前置詞＋不定詞」に共起する無強勢代名詞は、現在では不定詞に必ず後置される（para hacerlo 型）ことになった。つまり、無強勢代名詞が潜在的に後接辞的な性質を持っていたとしても、この「前置詞＋不定詞」においては最終的にはそれが失われてしまったのである。

para lo hacer 型において、無強勢代名詞が後接辞としての性質を持ち、そのために無強勢代名詞が不定詞に前置されたのだとすれば、他の形式からの類推で後接辞としての機能をもっと広げることができたはずである。フランス語やポルトガル語で para lo hacer 型が残っているのに対し、スペイン語では、最終的にこの形式が用いられなくなってしまったという点ことを考慮すると、para lo hacer 型が多用された理由として無強勢代名詞が後接辞的な性質を強く持っていたという点を挙げることには無理があるだろう。すなわち、para lo hacer 型においては、無強勢代名詞は別の要因によって前置詞と不定詞の間に置かれることが好まれたと考えた方が合理的ではないかと考えられる。

### 2.3 情報構造上の便宜—代名詞を前に出すべき情報構造上の理由について

情報提示上の便宜のために無強勢代名詞が不定詞の前に置かれやすくなっていた可能性についても考慮の余地はある。しかし、注6において述べたように、本稿ではまず音韻、音声的観点からの考察を優先して、情報構造に関する考察は今後の課題とした。無強勢代名詞は多くの場合旧情報を担うが、それ自身が無強勢の接辞であるために、その配置は音声的な環境に影響されやすく、情報構造の研究対象にするのが困難なためである。また、「前置詞＋不定詞」の場合には、para lo hacer 型はすでに用いられなくなっているため、para hacerlo 型との情報提示上の違いを比べるためには、かなり広範な資料と研究が必要になるという点もその理由として挙げられる。

無強勢代名詞を不定詞の前に出す形式 para lo hacer 型には情報提示の上で何らかの意味があったかも知れない。しかし、para lo hacer 型が現在用いられなくなっているのも厳然とした事実である。つまり para lo hacer 型に情報提示上の利点があったとしても、それは決定的な要因とはなりえず、最終的には他の要因を優先する方向に進んだと考えられるのである。

## 3. 結論

これまでいくつかの考察を行ってきたが、その結論は(14)において引用した Keniston (1937) の主張を裏付けるものとなった。すなわち、スペイン語およびロマンス諸語の持つ音声的な傾向を観察すると、「前置詞＋無強勢代名詞＋不定詞」の連辞において、この呼気段落の最初の要素である前置詞に第2強勢が置かれる可能性が高いということである。この前置詞の相対的な強勢は、ラテン語から引き継ぎ、ロマンス語に共

通する性質として常に存在した。しかし、この相対的な強勢は、第1強勢よりは弱かったため、前置詞が強勢語として認識されることはなかった。Keniston が引用 (14) の中で「前置詞が強勢を持っているように感じられた (prepositions were felt as stressed)」と述べているのは、まさにこの相対的な強勢を指しているのではないかと考えられる。

また、ロマンス諸語における無強勢代名詞の位置が主に音声的な要因によって決定されていたことも para lo hacer 型を維持するのに有効であったと考えられる。ロマンス諸語には接辞代名詞を句（または文）の第2位置に置き、呼気段落の最初の強い要素を際立たせるという傾向があり、その結果生じる「強—弱—強」のリズムに合うように句の要素を配置するのがその自然な語順であったと言える。前置詞に認められる第2強勢は、主たる強勢よりは弱かったが、それは十分に無強勢代名詞を後ろにとどめておくだけの強さを持っていた。それは呼気段落の最初の方に強勢が連続するのを避け、「強—弱—強」のリズムを効果的に作り出した。その結果 para hacerlo 型の傍らに存在した para lo hacer 型が多用されるようになったと考えられる<sup>11)</sup>。

一方、para hacerlo 型は前置詞の強勢の有無にかかわらず用いることが出来ることから、スペイン語史を通じて失われることなく使われ続け、中世、黄金世紀においては para lo hacer 型と共存した。Keniston も (14) の後半で「その世紀 (16 世紀) の普通の使い方は、前置詞を無強勢と考えて、無強勢代名詞を不定詞の後ろに置くものであった (But the usual practice of the century was to consider the preposition as unstressed, and hence the pronoun followed the infinitive.)」と記述している。この2つは16世紀まで共存し続け、時代や作者の好みによっ

11) 従って、para lo hacer 型は必ずしも「音韻 (音声) 上の制約」に反しているわけではないということになる。

て、どちらかが好まれるようになったのであろう。創作の幅を広げるためには、2つの選択肢があった方が好都合だったとも言える。

以上の考察から、para lo hacer 型を維持する主たる要因は、前置詞に置かれた第2強勢や、それによって作り出される「強―弱―強」のリズムであったと考えてよいであろう。これをもって本稿の結論としたい。他方、無強勢代名詞が潜在的に持っていたと思われる後接的な性質や情報構造上の便宜については、まだ議論の余地はあるものの、現状では主たる要因とみなすだけの根拠は認められなかった。これらの点が para lo hacer 型を維持する主たる要因であったならば、他の文法形式に見られるように無強勢代名詞に関連する動詞に前置する形式がもっとその使用の幅を広げていただろう。後接辞としての使用や情報構造上の利点が仮に認められたとしても、para lo hacer 型はスペイン語に定着することがなく、現代に至るまでに失われてしまっているのである。

最後に、本稿の目的からは少し外れるが、なぜ16世紀を過ぎて para lo hacer 型が用いられなくなってしまったかについて少し触れておきたい。これまでの一連の研究（菊田2004, 2008）から、スペイン語は15-16世紀までの「音韻上の安定」を求める時代から17世紀以降に「文法規則の再編成」<sup>12)</sup>の時代に移行したと推察できる。para lo hacer 型が消失したのは、文法意識が高まっていく中で前置詞が無強勢語であることの認識が広がったためではないだろうか。つまり、前置詞の第2強勢が

12) スペイン語が「音韻上の安定」を重視する時代から「文法規則再編成」の時代に変ったことを示すひとつの例として、中世時代には好んで用いられた融合形の (tomallo < tomarlo, dalde < dadle) の衰退・消失が挙げられる。これらの形式は本来音韻上の安定を求める圧力により生じたものと考えられるが、黄金世紀に入ると徐々に用いられなくなり、最終的にはスペイン語から完全に姿を消す。この変化は16-17世紀を通じて、形態のパラダイムの整合性や明解さを求める圧力が優位に立った結果生じたものであると考えられる。

また、文法意識が高まった要因としては、文学的傾向に変化が起り、散文が文学活動の中心になった点、活版印刷術の発明により書きことばが固定されていった点、スペイン語に対する文法研究、記述が盛んになった点などが挙げられる。

失われたということではなく、規則の上では前置詞は無強勢語であるという認識が広がったのである。無強勢であることを知った上で、無強勢代名詞を意図的に配置すると、para hacerlo 型にしかない。つまり、純粋に当時のルールに従う形に落ち着いたと考えられるのである。この点については、他の連辞に見られる無強勢代名詞の位置の変遷とも合わせて考えていく必要があるため、今後も継続して追究していきたい。

## 引用文献

- Alarcos Llorach, Emilio, 1994, *Gramática de la lengua española*, Espasa-Calpe, Madrid.
- Bassols de Climent, Mariano, 1992, *Fonética latina*<sup>8</sup>, CSIC, Madrid.
- Bourciez, Édouard, 1967, *Éléments de linguistique romane*<sup>5</sup>, Librairie C. Klincksieck, Paris.
- Canellada, María Josefa & Madsen, John Kuhlmann, 1987, *Pronunciación del español*, Castalia, Madrid.
- Canfield, Lincoln & Davis, Cary, 1975, *An Introduction to Romance Linguistics*, Southern Illinois University Press.
- Eberenz, Rolf, 2000 *El español en el otoño de la Edad Media*, Gredos, Madrid.
- Gili Gaya, Samuel, 1988, *Elemento de fonética general*<sup>5</sup>, Gredos, Madrid.
- Grandgent, C.H., 1991, *Introducción al latín vulgar*<sup>5</sup>, CSIC, Madrid.
- Hanssen, Federico, 1913, *Gramática histórica de la lengua castellana*, Halle, A.S, Max Niemeyer.
- 亀井孝, 川野六郎, 千野栄一 編, 1996, 『言語学大辞典』, 第6巻〔術語編〕, 三省堂, 東京.
- Keniston, Hayward, 1937, *The Syntax of Castilian Prose. The Sixteenth Century*, The University of Chicago Press, Chicago-Illinois.
- 菊田和佳子, 2004, “黄金世紀以降のスペイン語における人称代名詞弱勢形の位置の変遷 (II) —その要因についての一考察—”, 『スペイン語学研究 19』, pp. 61-78, 東京スペイン語学研究会, 東京.
- 菊田和佳子, 2008, “スペイン語の「(助) 動詞+不定詞」に対する無強勢代名詞の位置の変遷についての一考察—”, 『言語の個別性と普遍性』, 「神奈川大学言語研究」特集号, 神奈川大学言語研究センター, 神奈川.
- Lausberg, Heinrich, 1965, *Lingüística románica, Tomo I Fonética*, Gredos, Madrid.

- Menéndez Pidal, Ramón, 1944, *Cantar de Mio Cid I, Crítica del texto y gramática*, Espasa-Calpe, Madrid.
- Menéndez Pidal, Ramón, 1989, *Manual de gramática histórica española*<sup>20</sup>, Espasa-Caple, Madrid.
- 中岡省治, 1992, 『中世スペイン語入門』, 大学書林, 東京.
- Navarro Tomás, Tomás, 1991, *Manual de pronunciación española*<sup>25</sup>, CSIC, Madrid.
- Posner, Rebecca, 1996, *Las lenguas Romances*, Cátedra. Madrid.
- Real Academia Española, 2005, *Diccionario panhispánico de dudas*, Madrid.
- Sánchez Miret, Fernando, 2007, “Morfosintaxis histórica”, *Manual de lingüística románica*, José Enrique Gargallo Gil y María Reina Bastardas (coords.), pp. 251–274, Ariel, S.A, Barcelona.
- Valdés, Juan de, 成立年不詳, *Diálogo de la lengua*, ed. Cristina Barboani, Cátedra, Madrid, 1990.

## 資料体

- Cervantes Saavedra, Miguel de, 1605, *Don Quijote de la Mancha*<sup>22</sup>, Edición de John Jay Allen, 2003, Cátedra, Madrid.
- Juan Luis, Arcipreste de Hita, *Libro de Buen Amor*, 1343?, Biblioteca Virtual Cervantes, Fundación Biblioteca Cervantes. (<http://www.cervantesvirtual.com/servlet/SirveObras/scclit/24661685545133385754491/p0000001.htm#1>)
- Rojas, Fernando de, 1499?, *La Celestina*, Edición de Dorothy S. Severin, 1991, Cátedra, Madrid.